（3種郵便物認可）

地域と協働 レトルトカレー商品化

コンセプト考え、改良重ね
企業・飲食店の力借り実現

横浜市立桜岡小 5年「総合」

「地域に対する学びを深める」ことを大きな目標とし、子どもたちの興味・関心を基にテーマを決めて学びを深めている、横浜市立桜岡小学校（後藤俊哉校長、児童555人）の総合的な学習の時間。昨年度の5年生は地域の企業や飲食店と協働し、自分たちがコンセプトを考えたレトルトカレーを商品化する活動に取り組んだ。子どもたちは自分たちが考え、提案したコンセプトが地域の企業や飲食店の人たちの力で実現する貴重な経験をするとともに、これまで以上に地域を理解し、地域の人たちとつながる機会にもなった。

スパイスを調合して独自のカレー粉を作る5年生たち（上）、5年生が考えた「笑顔満開！さくらおカレー」のパッケージ（左）

市学力・学習状況調査の結果で分かった「学力が高い子ほど『人と関わることが苦手』」という子どもたちの姿から、子どもたちの実態に合った「魅力ある」授業づくりを進め、「学び合い」「深い学び」を充実していくことに取り組み続けている桜岡小学校。地域にはさまざまな企業、団体、店舗があり、住民の学校に対する思い入れも強い。

そうした中、「総合的な学習」では「地域に対する学びを深める」ことを大きな目標とし、子どもたちの興味・関心を基にテーマを決めて学びを深めている。昨年度の5年生は、学年の教員たちが「地域の企業や店舗と協働して、商品開発のようなことができれば」と考える中で授業がスタートした。

「カレー」がテーマとなったきっかけは、社会科で輸出入について学んだこと。そこで「私たちの身近に、どんな輸出入に関係する企業などがあるか」を考えたことをきっかけに、学校の隣に本社がある、業務用カレー粉、カレールー、スパイスの加工メーカー・交易食品㈱に関心が向いた。

また、家族からも「昔は本社でもカレー粉などを製造していて、近くを通るといい香りがしていた」など交易食品についての話を聞き、コミュニケーションを深めながら地域の歴史も学んでいった。

その後、「総合的な学習」では、交易食品の社員が講師を務めて出前授業を実施。5年生たちはカレーの歴史などを学ぶとともに、同社が用意した10種類以上のスパイスの香りをかいだり、グループごとにそれらスパイスを自分たちで調合してオリジナルのカレー粉を作ったりした。

完成したオリジナルのカレー粉は実際に調理して試食し、調合割合が異なると味も大きく変わることを学んだ。こうした経験を通して、5年生たちは「自分たちのカレーを作り、多くの人に食べてもらいたい」という思いを強めていった。

こうした取り組みと前後して「自分たちや先生方だけでは商品化できない」と感じた5年生たちは「カレーを詳しく知る人に話を聞きたい」と考え、地域でカレー店「スパイシーモンキーズ」を経営し、店主を務める桜岡小学校の卒業生に依頼し、協力してもらうことが決まった。

5年生全員で試食し、さらに要望を伝え、改良した上で販売するカレーが完成した。商品名やパッケージのデザインについては、5年生一人一人が考えたものの中から投票で選んで採用した。

こうして、5年生がコンセプトを提案するとともにパッケージデザインと商品名を考え、スパイシーモンキーズがレシピを監修、交易食品がカレールーを供給した「笑顔満開！さくらおカレー」が完成し、3月1日からスパイシーモンキーズや地元・上大岡駅の百貨店などで販売を開始した。

翌日の3月2日には、給食に「さくらおカレー」が登場。その日の給食だよりを5年生が作成した。3月21日には希望した5年生たちが参加し、近くのショッピングモールで販売会を実施した。

3月1日の販売開始後に百貨店の売り場を訪れて「どんな人が購入するか」を調べる子どもがいたり、3月21日の販売会で普段は静かに見える子どもが積極的に宣伝する姿があったりするなど、子どもたちの新たな良さの発見にもつながったこの取り組み。

桜岡小学校では「子どもたちが考えたことを地域の企業や店舗の人たちに伝え、それが商品となるなどの貴重な経験をすることができた。同時に、これまで以上に地域を理解し、地域の人たちとつながることができた」としている。

横浜市立桜岡小学校☎045・842・2783

百貨店などで販売

商品化は、児童・生徒の望ましい勤労観・職業観や地域貢献意識を育むことを目的として横浜市が進める「はまっ子未来カンパニープロジェクト」の一環として実施した。桜岡小学校の5年生、スパイシーモンキーズ、交易食品が協働して取り組みを進めた。

5年生たちが「どんなカレーを作りたいのか」「どんな人に食べてほしいのか」などをスパイシーモンキーズの店主や交易食品の社員に伝える中で、コンセプトは「子どもから大人まで、みんながおいしく食べられる」と決定した。試食時にアレルギーがあるため同じように食べることができなかった子どもがいた経験から、アレルギー物質を可能な限り使用せずに作ることにもこだわった。

スパイシーモンキーズの店主や交易食品の社員も5年生たちの思いを受け止め、試作品を作り上げた。

読書推進へ 校内至る所に本展示

学校図書館

「140」。この数字は、東京都荒川区立第一日暮里小学校の子どもたちが学校図書館から借りている。数で比較しても全国平均の3倍ほどで、コロナ禍でも大きな成果を上げていることが分かる。子どもの読書活動に力を入れていることで知られる東京都荒川区。区内に

昇降口を抜けて階段を上がる手前に、月ごとに替わる「おすすめの本」を紹介するコーナーがある

学校（上）

学習内容などを踏まえ、このコーナーも月ごとに展示する本を替えている。

毎年、4年生は総合的な学習の時間を使い、「ブックメニュー」（探究学習）に取り組んでいる。手に取った本を読み、その中に出てくる料理を参考に、給食のメニュー

一度は食べたい！この給食 ㊾

東京・東大和市

おかず充実、赤飯弁当で入学祝い

同市は30年以上前から、毎年3月、市内の小学6年生に卒業を祝う弁当を給食で提供してきた。令和2年度はコロナ禍で、卒業・入学の時期が臨時休業となったことから、時期を変更し、中学1年生に「入学お祝い給食」として実現させた。弁当箱にはお赤飯に加え、鳥のから揚げ、春巻き、シューマイなど、子どもたちの大好物を詰め込んだ。弁当箱を開けた瞬間、「おお～」という歓声が上がった。

連載・第4回

エネルギー問題を考える
教科間連携
主体的・対話的で深い学び

子どもたちにとって、エネルギーの一つ。課題を「自分ごと」として学校の授業が重要な役割を果たす。東構成する「エネルギー環境教育を推進で連続した学習を意識して、放射線教いる。学年や教科、校種を越えた効果との交流なども活発だ。

原子力を軸に発展した

青木久美子主任教諭（中央）、内藤理恵指導教諭（左）、瀧渕岳教諭（右）

プラスアルファの「発展」授業はできる

昨年度はカリキュラムマネジメントの視点から、中学校3年間と高校理科における放射線教育の指導事項の系統性を整理し、指導計画を一覧表にまとめた。

現行の中学校学習指導要領・理科で放射線を扱うのは2学年の「電流」と3学年の「エネルギーと物質」においてだが、それらをつなぎ合わせただけでは学習は深まらない。

学習指導要領が示す「現代的な課題」放射性廃棄物することで、決に向けて考える環境とができる。

教科や学年を越えて、

学年や校種、た指導が必例えば、1音」で光が伝よっていろ、れることを展的な内容、外のガンマ線

今後の目標は、「物理基礎」を中心とした高校理科を上るよう学び、高